

## 松風に乗って



「マツ」は、日本の風景の代表的な植物であり、市内でもアカマツは印象的な樹木です。しかし、松枯れ（マツ材線虫病）や森林の変化などの理由で数を減らし、現在は群落で見られる場所が限られています。

以前、レンジャー新聞 Vol. 120 でもアカマツについて語ったことがあります、実は本種に関わる生き物は多く、生物の多様性を高める存在です。私は食べたことはありませんが、もちろんマツタケとの関係は有名です。そしてアカマツに限らず、マツの仲間に頼る生き物の中でも、止まり場などに利用するタカ類の姿や、初夏にアカマツなどの周辺に現れるハルゼミの寂しげな鳴き声は印象的です。また、種子を求めて秋から松ぼっくりに集まるイスカやカラ類などの野鳥、リスの仲間などもよく知られています。

市内で見られるアカマツの群落は山林内の限られた場所以外だと、ゴルフ場が最も広く見られる場所となっています。人工林とは言え、上記の理由で貴重であると思います。一方、松枯れを起こすマツノマダラカミキリが媒介するマツノザイセンチュウの存在により、その対策に悩まれることが多いと推測できます。

アカマツ群落からまだ雪に覆われている山々を眺めながら、静かにマツの独特ないい香りを運ぶ春風を感じることは、私にとって早春のほっこりする瞬間の一つです。そんな単純な幸せを、これだけ身近で簡単に得られることはありがたいと思う一方、自然離れで複雑化して行くこの世の中とのギャップを振り返ると、少し寂しくなります。しかし、あきる野は大都會の端に位置しながら、その影響を受けることもあれば、逃れている部分も多いと感じます。きっと、自然を大切にする想いで暮らす市民の方が多からこそ、こういう地域でいられるのだと思います。

ウグイスの鳴き声が響き渡り始める、この頃の想いです。  
(パブロ)



たくましく空に延びる  
アカマツたち